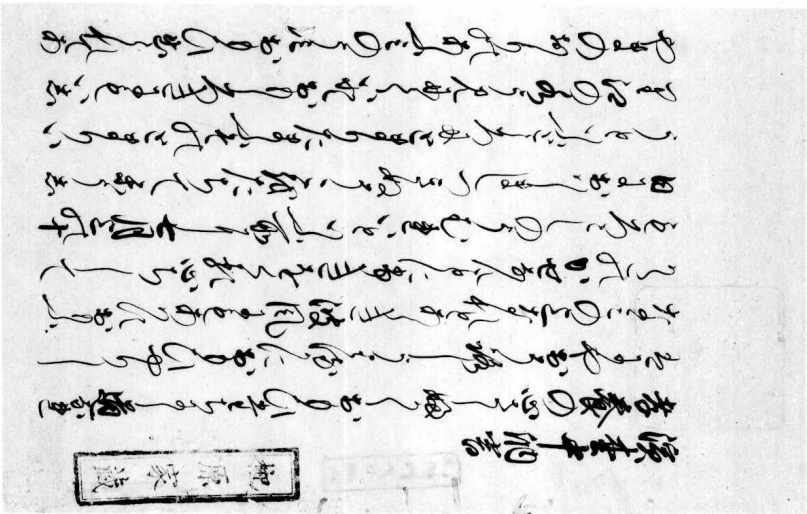


日本古典文學大系 77

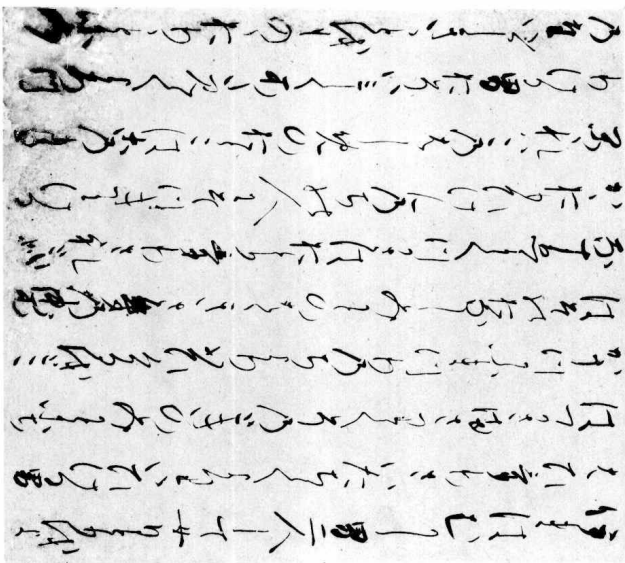
篁物語
松中納言物語
濱中物語

遠藤嘉基
松尾聰 校注

岩波書店刊行



源平中納言物語 國立國會圖書館本



源平中納言物語 靜嘉堂文庫本

簗・平中・濃松中納言物語

日本古典文学大系 77

昭和 39 年 5 月 6 日 第 1 刷 発行 ©

定価 1000 円

校注者 ^{えん}遠 ^{どう}藤 ^{よし}嘉 ^{もと}基
^{まつ}松 ^お尾 ^{さとし}聰

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋 2ノ3
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布 385
山田一雄

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩波書店
神田一ツ橋 2ノ3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

算物語 平中物語	遠藤嘉基校注	三
解説		五
凡例		九
算物語		
本文		二五
補注		三〇
平中物語		
本文		五
補注		一〇七

浜松中納言物語……………松尾 聰校注…二三

解説……………二五

凡例……………二七

本文……………三五

補注……………四四

平篁
中物
物
語語

遠
藤
嘉
基
校注

解 説

篁 物 語

《篁物語》の発見と諸本

写本としては、(一)彰考館蔵《篁物語》、(二)宮内庁書陵部蔵《小野篁集》の二本と、そのいずれかの影写本があるだけである。このうち、(一)は、もと甲・乙の二本があった。甲本は枅形本、乙本は美濃判の袋綴本であるが、乙本は甲本の転写本である。その甲本は、たぶん鎌倉時代の古写本の影写か、という。「文学」創刊号、付録解説）その影写は、写本の端に、古筆 奥山立庵ノ取次ヲ以写之 とあるところから察するに、江戸初期のものらしい。立庵は、福田耕二郎氏（彰考館）の教示によれば、光邦公時代の人で、幕府の医者であるが、水戸家にも来たことがあるらしい、とのことである。乙本は、戦災で焼失してしまった。(二)は、靈元天皇御宸筆の《小野篁集》の外題のある、江戸初期の写本で枅形本である。さて、以上の諸本は、字句においてそれぞれ若干の異同がありはするが、ほぼ同系統とみてよかりそうである。

この作品は、《物語集》《日記》と、三様に呼ばれていた。もちろん、河海抄や花鳥余情に引用されているのは一部分だから、それらから直ちに断定することはできないが、だいたい同じものが三とおりに呼ばれていた、と考えてよかり

そうである。一つの作品が、〈物語〉とも〈日記〉とも呼ばれていたこと、また〈集〉とも言われる可能性のあることについては、すでに知られていることである。

ところで、この〈箕物語〉あるいは〈小野箕集〉と言われるものが、世に知られるようになったのは、後藤丹治博士が「国語と国文学」(昭和二年二月)誌上で、書陵部本を紹介してからである。その時始めて、河海抄(夕顔巻・権巻)や花鳥余情(明石巻)などに、〈箕日記〉として引用してあるのと、〈小野箕集〉が関係のあることが指摘されたのである。この書陵部本は、桂宮本叢書第二巻(書陵部編、昭和二六年)に翻刻収載されたが、彰考館甲本の全貌が学界に紹介されたのは、前掲「文学」創刊号(昭和八年四月)誌上においてである。ひきつづいて、宮田和一郎氏によって、彰考館乙本をも加えた「校註箕物語」(昭和十一年)や「王朝三日記新釈」(昭和十三年)、また菊田茂男氏の「新講箕物語」(昭和三十一年)、山岸徳平氏の「平中物語・箕物語・和泉式部日記」(「日本古典全書」昭和三四年)などが出て、世に流布するにいたった。

物語の構成

二部から成る。第一部は、箕が異母妹に漢籍を教えている間に恋がめばえたが、妹の母親に気づかれて仲をさかれ、妹は悶死する。そのあと、妹は亡霊となって、男のところへ現われる、本文三五頁三行まで。第二部は、右大臣へその娘を懇望して、三君を得、榮進して宰相となる話しであるが、一部と二部との間は、妹の亡霊が、右大臣の娘と結婚した箕のところへ来て、怨み言をいう場面につながれている。

箕の系譜と伝記と作品

承和七年(八四〇) 二月辛酉、召_レ流人小野篁。(39)

承和八年(八四一) 閏九月乙卯……朕顧_レ惟旧、且愛_レ文才、故降_レ優賞、殊復_レ本爵。(40)

承和一四年(八四七) 正月己酉、從四位下小野朝臣篁並為_レ參議。(46)

仁寿二年(八五二) 十二月癸未、參議左大臣從三位小野朝臣篁薨。(51)

右は、文徳実録・日本後紀・日本逸史・続日本後紀・公卿補任・大日本史などによって作った、篁の伝記録から、抜萃したものである。

作品は、右の記録の中であげたもののほか、現存するものでは、経国集・扶桑集・本朝文粹・和漢朗詠集などに詩文関係、古今集・新古今集・続古今集・玉葉集・新千載集や篁物語などに和歌、がある。野相公集というのがあったらしいが、今は伝わらない。

さて、右の記録から見ると、(篁物語)の第一部は、彼の二一歳から遠くない頃の話しとなろうか。ただし、それだけのこと。そのほかでは、遣唐使事件での、篁の態度が、物語の第二部における、右大臣の娘を乞いうける時のそれに、似通ったもののあるのを、匂わせるぐらいである。

説話のなかの篁

篁の像は、むしろ説話の中に描かれる。それは、前掲の「朕……愛文才」(承和八年条参照)につながるもので、十訓抄・江談抄・東斎随筆などに見える、「無悪善」という落書や、「一伏三仰不來待書暗降雨恋簡寝」を見事に解いた話しなど、よほど人々の口に乗っていたと見え、宇治拾遺物語にも収められているが、その物語にはさらに、「片仮名のネを一二

書いたもの」を読み解いた話でもある。また、篁の詩才が白楽天と同じであることを語る挿話が、江談抄と撰集抄に出ているほかに、白楽天が篁の渡唐を聞いて、よろこび待った話しが古事談にある。いずれも、篁の文才の秀れていたことを語るものだが、かの、三守の大臣に「娘を望む」詩文を手渡して、簪になる話しもまた、以上のことにつながるのと見えよう。このほか、遇三百鬼夜行一事とか、為「閻魔庁第二冥官」事などが江談抄に見えるが、やはり篁の、これは才の広さを語ったものと言えようか。

こうして、篁の才をめぐって、いろいろな話しが作られていく中に、話しは次第に神秘化していく。発心集に見える、「亡妻現身帰来夫家事」は、そのよい例であろう。

〈篁物語〉の成立

この物語が篁の自記でないことは、「あやしく篁が見えぬかな」「これなむ、名に立つ篁なりける」などでわかるが、では、誰によって何時ごろ成立したものか。これについては、作者はとにかくとして、平安朝初期・中期・末期・鎌倉期以降、とだいたい四説にわかれ、まだ明らかな決め手はない。

ところで、以上において、説話の中の篁を眺めてきたが、注目されるのは、「求婚の話し」と「亡妻の霊の話し」とが、それぞれ前者は〈篁物語〉の第二部へ、後者は第一部と第二部の橋渡しの役を勤めていることである。けっきょく、第一部前半の、篁と妹との交渉のところだけが、後世の説話と切り離されていることになる。しかも、その部分も、伝記録に見るような篁の像ではなく、山岸説のように、説話のそれに近いものである。そのことは、第一部の稻荷参詣のあたりが、今昔物語の「近衛舍人共稻荷詣重方值女語」(巻二八)や「大和国人得人娘語」(巻三〇)などと関係があるのでは

ないか、と思わせるような内容であることも、関連を持つ。とすると、こういうことが考えられないか。すなわち——、元来「求婚」と「亡霊」の説話群のほかに、もう一つ、「篁と異母妹との交渉」に関する説話があったのだが、それを誰によってかはわからないが、「亡霊」説話を仲介にして、「篁と妹」と「求婚」の二説話をまとめて出来あがったのが、現存の《篁物語》ではなからうか、というのである。一部と二部とは、やはり別々のものであったに違いない。一部には、新古今以下の歌集収載歌があるのに、二部にはないことや、一部が心理的秩序に従う姿勢を見せているのに、二部は客観的表現の態度をとっていること、などからである。しかし、いずれの内容も、おそらくは伝承された話しであつたに違いない。それは、すでに先学の諸氏によって明らかにされたところの、れいの「けり」の用法、すなわち、「ぞしける」「なむしける」が散文に現われてくること、などによってわかるし、この注釈の中で、しばしばわたしが用いた《くさり型》の構文の使用も、あるいは伝承性の一つの支えになるかも知れない。

その、今日の《篁物語》が成立したのは、物語の中の歌が、新古今以下の歌集に出てくるところから見て、鎌倉初期に成立していた、とする山岸説に賛成したい。ただし、今日の形になつたのが、そうなのであつて、これらの話し、特に第一部のは、かなり古くからあつたのではなからうか。形容詞を始めとする語彙量の問題、《くさり型》構文の存在、さらには《場面転換》による叙述のしかたなど、これは作者が下手だからと言つてしまえばそれまでだが、かえつて古拙を語るもののようにさえ、わたしには考えられる。そこで、もし、れいの「師走の月夜」が枕草子にあつたとするならば、少なくとも第一部は、一一世紀の初めから大して下らぬ時代に成立した話し、ということになるうか。ところで、第一部の内容は、先述の今昔物語とのつながりもさることながら、実は「継子物語」を思わせるに十分である。それならば、落窪物語が、一〇世紀の終わりか一一世紀の初めの成立だから、枕草子から遠くない時代に、第一部の話しが成

立していてもおかしくない、と思うのである。

参考文献

重要なものについては、〈篁物語〉の発見と諸本のところで述べてきた。注目すべき文献や論考はそれらの中にも、触れてあるが、「平安朝日記研究」(今井卓爾)、「物語日本文学史論」(三谷栄一)、「日本小説史論」(目加田さくを)、「日本文学史^{中古}」(久松潜一編、岩清水尚)、「更級日記・平中物語・篁物語・堤中納言物語」(現代^{語訳}日本文学全集、池田弥三郎)、「古典と作家」(岡一男)、「日本文学大辞典」(新夕社)のほか、「篁物語成立に関する覚書」(文学・語学)第三号、山口博などが参考になろう。各方面にわたって、研究の余地の多い作品である。

平中物語

〈平中物語〉の伝本

静嘉堂文庫に、「平中物語 冷泉為相卿筆」という題簽のあるのが、今日唯一の伝本である。河海抄に、貞文日記として引用してある部分と、これを照合すると、ほぼ同じである。この貞文が、補注一(一〇七頁)で示すように、平中と号していたわけだから、右の貞文日記は、平中日記とも考えてよからう。尊卑文脈に平中とあり、本朝書籍目録仮名部にも平中日記とあることを重んずれば、平中物語は平中物語と書くべきところだった、ということになる。なお、物語が日記とも呼ばれることについては、もはやここで触れる必要はあるまい。

なお、季吟の大和物語抄や御巫本大和物語の一七二段から一七三段の間に挿入されている平中説話は、本文に異同がありはするが、この平中物語と同じで、その断片と思われるから、おそらく、この平中物語にも諸本があったのではなからうか。平中物語の所在が知られたのは、静嘉堂文庫本によってであり、川瀬一馬博士が「国文学誌」(昭和六年一月)で発表された論文が、公的には最初と言われる。

系譜・官歴・作品

平中の系譜については、補注一参照。くわしくは、桓武天皇から五代の子孫であるから、血筋はきわめてよい。貞文とあるが、さたふむ・さたふん・さたふ、あるいは定文とも書く。貞文・定文といずれにも書くことは、その当時はよくあったことで、平中・平仲についても、同じことが言える。

平仲とあるのは大和物語抄などだが、ここでは、この仲の字に基づいて、「平仲。平貞文。字仲因号平仲」と述べ、仲は字(あ)である、と理解している。しかし、これには確実な根拠があるわけではない。平中とあるのは、尊卑分脈や本朝書籍目録などで、この大系本でも、いちおうこれに従ったが、なぜ平中と号したかということになると、諸説があつてはつきりしない。業平を在五中将(在原、阿保親王の第五子、左近衛権中将)と言ったことにならえば、平中将の略とする、硯鼠漫筆などの説がおもしろいのだが、中将になったのは父の好風だから、これも穏やかでない。そこで、平中将好風の愛子であるところから、父の官名で通称されたのではないか、あるいは、好風に対して発生した通称の平中が、好風の死後に貞文に転用されたのではないか、とする秋谷説も生まれる。この考えは中国では通用しないことだが、わが国の場合でもいかがであろうか。願わくは、これを裏づける資料がほしい。次は、「左近衛中将好風息三子中。故号

平中」とする、和歌色葉集などの説であるが、萩谷考証によると、兄弟があつたという証拠はないし、だいいち、右のような説ならば、むしろ仲の字であるべきではないのか。というわけで、只今のところ、何のきめ手もない。要するに、いずれも仲・中の文字に基づいての論であるが、仲・中が通い用いられたということになると、文字に即して論するのは、仲・中いづれを正しとしていたか、が判明しない以上、容易には決定できないことと思う。

古今和歌集目録によって、平中の官歴を摘要すると、次のとおりである。

寛平 三年(八九二)一二月 任内舎人

寛平 五年(八九四)二月一六日 任右馬権少允

寛平 九年(八九七)五月二五日 任右兵衛少尉

延喜 六年(九〇六)正月 七日 叙従五位下外衛

延喜一〇年(九一〇)正月一三日 任参河介

延喜一三年(九一三)二月二八日 任侍従

延喜一七年(九一七)五月二〇日 任右馬助

延喜一九年(九一九)正月二八日 任左兵衛佐

延喜二二年(九二二)正月 七日 叙従五位上

延長元年(九三三)六月二六日 兼参河権介 九月二七日卒

この官歴は信用してよからう。没年について、延喜元年・延長六年説があるが、いずれも従いがたい。没年時の年齢は明らかでないが、諸家だいたい五〇歳前後、五六歳あたりまでか、と推定している。